

## (2) さつまいも(かんしょ)

### ア 各病害虫の防除

黒あざ病、軟腐病

黒斑病、つる割病

立枯病

紋羽病(紫紋羽病)

**基腐病**

アブラムシ類

イモキバガ(イモコガ)

コガネムシ類

**ナカジロシタバ**

ハスモンヨトウ

ハリガネムシ類(コメツキムシ類幼虫)

ネコブセンチュウ

野ねずみ、もぐら

## ア 各病害虫の防除

### 【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

- ・稲用に登録されている農薬のうち WCS 用イネで使用できる農薬及び飼料として使用する粳米についての農薬使用については、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「飼料用稲の農薬使用」](#)を参照する。
- ・病害の掲載順は、水稻の生育ステージの進展により、発生する可能性がある病害の順である。

### 黒あざ病、軟腐病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 貯蔵用の種いもは掘取時に株選別する。

### 黒斑病、つる割病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 貯蔵用のいもは、種いも用、食用を問わず掘取時に株選別する。
  - 2 種いもは 47～48℃の湯に正確に 40 分間浸してからすぐ伏込む。
  - 3 かき苗をやめ、基部 6 cm くらいを残して切り取り、苗の基部約 1/3 を 47～48℃の温湯に正確に 15 分間浸してから植付ける。
  - 4 つる割病苗は処分する。
- ※害虫などの食痕からも感染しやすい。  
※つる割病に対してシルクスイートは弱く、ペニコマチは特に弱いので注意する。
- 5 つる割病の発生したほ場には 3～4 年間作付けしない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【黒斑病】](#)・[【つる割病】](#)

- 1 土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 ペノミル耐性つる割病菌の発生が懸念される場合には、トリフミン水和剤で消毒する(令和 7 年試験研究成果普及情報)。

### 立枯病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病の多いほ場に作付けしない。
  - 2 土壌 pH が高いと発病しやすいので、pH5.5 以上のほ場には石灰を入れない。
  - 3 土壌乾燥時には畦立てマルチをしない。
  - 4 地温の上昇を抑えるマルチ資材を使用し、畦立て後すぐに植付ける。
- ※放線菌による土壌病害で高地温、高 pH、乾燥条件下で発病しやすい。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 植付け 10～15 日前に土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

### 紋羽病(紫紋羽病)

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場では 2 年以上イネ科作物と輪作する。
- 2 早生品種を作付け、早掘りする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病場所には目印をしておき、掘取後畦に沿い土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

### 基腐病

---

(予防に関する措置)

- 1 ほ場の排水対策を行う。
- 2 種いもは発病ほ場から採種しない。無病種いもあるいは由来のわかる健全な苗を使用する。
- 3 種いもからの採苗時は地際から 5 cm 以上切り上げて採苗すると共にハサミはこまめに消毒(火炎滅菌又はていねいな洗浄と拭き取り)する。
- 4 発生ほ場で使用した農機具や資材は、消毒や洗浄を十分に行う。
- 5 収穫後の残渣はできる限りほ場外に持ち出して廃棄するとともに、ほ場は速やかに耕うんして残渣の分解を促す。
- 6 発生ほ場では、原則として 2 年以上はさつまいも以外の作物を栽培する、又は休耕する。

- 7 定植の前に予防的に苗を殺菌しておく。  
 ※宿主作物はヒルガオ科植物である。  
 ※病原菌は植物残渣上で越冬し、それが翌年の伝染源になる。  
 ※感染いもから採った苗も伝染源になる。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発病株及び疑義株(茎葉や塊根)は速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出して廃棄するなど、適切に処分する。
  - 2 ほ場の見回り等による発病株の早期発見に努め、適期に薬剤散布等を実施する。
  - 3 茎葉散布による防除を実施する場合には、葉よりも株元や茎に十分に薬液が付着するよう散布する。
  - 4 発生状況に応じて、土壌消毒を実施する。
- ※発病初期には、感染株の葉が黄化して生育不良になり、茎の地際部が暗褐色もしくは黒色に変色する。症状が進行すると茎葉の枯死や塊根の腐敗が認められる。  
 ※発病株には多数の粒状の柄子殻が形成され、雨水等により内部から大量の胞子が漏れ出す。胞子は風雨やほ場の停滞水により拡散し、周辺の株に感染する。  
 ※塊根は主になり首側から腐敗する。  
 ※塊根は収穫時に無病徴でも、収穫後の貯蔵中に発病することがある。  
 ※本県では令和3年に初めて発生が確認された。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
  - 2 未消毒の苗は薬剤で処理する。
  - 3 発病株の除去後に、周辺株への感染予防のため薬剤を施用(散布)する。また、大雨や台風の通過後にもほ場全面に薬剤を施用(散布)する。
  - 4 次作の基腐病の発病抑制を目的に、前作の栽培終了後に、キルパーで土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。[\(農薬登録情報\)](#)
- ※薬剤抵抗性発達防止のため、QoI系統の連用は避ける。

## アブラムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を散布する。
- ※ウイルス病を媒介する。

## イモキバガ(イモコガ)

(判断、防除に関する措置)

- 1 干ばつの年に大発生することがある。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 早期発見に努め、発生初期に薬剤を施用(散布)する。

## コガネムシ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 例年被害の多いほ場では、試し掘りを行い、幼虫や食害が見られる場合には収穫を早めに行う。
- 2 未熟堆肥はコガネムシを誘引するため、施用しない

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 畦立て時、薬剤を施用する。
- 2 7月中旬から10日おきに2~3回、薬剤を処理する。
- 3 植付前、薬剤を処理する。

※成虫は、ブドウ、マキ、カキ、クリ等樹木の葉を好んで食べるので、ほ場周辺の発生に注意し、捕殺又は薬剤防除する。

## ナカジロシタバ

(判断、防除に関する措置)

- 1 幼虫の齢期が進むと摂食量が多くなり、また、薬剤の効果が現れにくくなることから、発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、若齢から中齢期までに薬剤散布等を行う。
- 2 葉裏に幼虫が生息していることから、薬剤散布を行う場合には、薬液が葉裏にも十分付着するよう、丁寧に散布する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 早期発見に努め、発生初期から薬剤を施用（散布）する。

## ハスモンヨトウ

---

- ・ [共通防除の章の共通病害虫の防除の項「ハスモンヨトウの防除」](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に使用する。
- 2 薬剤を散布する。

## ハリガネムシ類(コメツキムシ類幼虫)

---

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。
- 2 土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

## ネコブセンチュウ

---

- ・ [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

## 野ねずみ、もぐら

---

・野ねずみ [農薬登録情報](#)

殺そ剤を使用し、春期繁殖前の2～3月に共同で大面積を防除する。この場合、穴をもれなく探し、投入する。

・もぐら

もぐらは、土の中のミミズやコガネムシの幼虫などをエサとしている。土の中を掘ってこれらのエサを探してできるのがもぐらのトンネルである。もぐらのトンネルには、ほぼ毎日通る本道(生活道)とたまたまエサの匂いを感じて探しに行くときにできた支道(探餌道)がある。トンネルを潰して、復旧していれば本道と判断できるので、この場所に捕獲器を設置する。

(捕獲)

- 1 もぐらの本道に捕獲器を仕掛ける。本道は、田畑なら畦畔に多く、草原ではその縁辺や樹木の多い部分、垣の下などに多い。そのような場所の火山状の土の盛り上がりを見つかり、スコップで掘ってみると、斜めに下方に走っているトンネルがあり、それに沿って深く進むと、やがて水平に走るトンネル(本道)に達する。そこで捕獲器が入るだけの土を取り去り、その土をスコップで細かくつぶし、石や小枝などを取り除く。この際トンネルよりも少し深く掘り、ここに捕獲器を仕掛け、さきに細かくほぐしておいた土をかけ引金板とすれすれになるようにする。
- 2 円筒タイプの捕獲器の場合は、底が地面に少し埋まるぐらいに設置し、周囲のすき間ができないように土を入れ込み、動かないように固定し、上から土をかぶせる。1頭獲れても、また獲れることがあるので、数日同じ部分で続けてみるとよい。
- 3 本道が見つげにくい場合は、土手のように土の盛り上がった新鮮な側道に仕掛ける。この土の盛り上がりを踏んでおき、数時間後～翌日、つぶされた土手が再び盛り上がっていたら仕掛ける。
- 4 手の臭いが土や器具につかぬようにするため手袋をはめ、素手では一切触らないようにする。

(音響によって追い払う)

- 1 風車からの動力により、畑の土中に音響を伝える装置がある。そのような装置を利用するか、工夫する。